

漂流

颶風が襲ひつつあつた。そこで自分は岸打つ大波を見んと大風に防波壁の上に坐つて居た。そして老人の天野甚助が自分の横に坐つて居た。東南は一面に何處も黒味を帯びた青の薄暗がり、唯だ海だけは一種朽葉色の妙な色をして居た。巨大な濤が既に山と高まつて推し寄せつつあつた、百碼離れたところでそれが雷と地震とのやうな音を立てて崩れ砕け、その飛沫を傾斜面一面に布と展べ散らせて、二人の顔を濡らす。どどんと長く打ち砕ける度毎に、ヂヤヂヤヂヤと引いて行く砂利の音は正しく全速力で走つて居る列車の音のやうであつた。自分は怖ろしくなる、と甚助に言つた。すると甚助はにこりと笑つた。

斯う言ふのであつた。『これよりか非道い海で、私は二日二た晩の間泳ぎました。私はその時十九でありました。八人の乗組の中で、助かつたものは私だけでありました。』

『私共の船は福壽丸といふ名の船でありまして——此町の前田甚五郎が有つて居りました。乗組は、一人除けて、皆んな焼津の者でありました。船長は齋藤吉右衛門といつて、六十を越えた男でありました。城の腰に住んで居りました、——丁度此處の後の街路であります。も一人老人が

乗つて居ました。仁藤正七といつて、これは新屋村あらやに住んで居りました。それから、四十二になる寺尾勘吉が居ました。その弟の巳之助、これは十六の子供でありましたが、これも一緒に居ました。此の寺尾二人は新屋に住んで居たのであります。それから齋藤平吉が居ました、三十になる。それから松四郎といふ男が居りました、——これは周防の男でありましたが、焼津に住み着いて居たのであります。乗組の今一人に鷲野乙吉が居ました。これは城の腰に住まつて居りまして、やつと二十一でありました。私は船の中で一番の年若でありました、——寺尾巳之助を除けては。

『萬延元年——申の歳でありました——その七月の十日の朝焼津から船を乗り出しました——讃岐へ向けて。十一日の夜紀州沖で、東南からの颪風あつちかぜに襲はれました。眞夜中少し前に船は顛覆しました。ひつくらかへると思つた時、私は船板を一枚とりあげて、それを投げ出して海へ飛び込みました。その折は怖ろしい強い風で、夜は眞つ暗で、やつと二三尺先きが見える計りでありましたが、仕合せにもその板が見つかりまして、それを身體の下へ置きました。と、直ぐに船は沈んでしまひました。私の近くに、海に、鷲野乙吉と、寺尾兄弟と、それから松四郎といふ男が居ました、——皆んな泳いで、他の者の居る様子は見えませんでした。多分船と一緒に沈んだのでありませう。私共五人は大波と一緒に浮き沈みしながら互に呼び合つて居りました。見ると誰れも板か何かの材木を有つてゐますのに、寺尾勘吉だけ有つて居りません。そこで私は勘吉に「あにき、お前にや子供がある。おりやまだ若い。この板をお前に上げよう」と呼ばはりますと、勘

吉は大聲で「此海ぢや板はあぶない——材木を離れて居れ、甚よ——怪我するかも知れんぞ」と言ひ返しました。それに返事も出来ぬうちに、黒山のやうな浪がおつかぶさりました。私は長いこと下に居りましたが、また水の上へ出て来た時には、勘吉の姿は見えませんでした。年下の者はまだ泳いで居ました。が私の左手の方にさらはれて行つて居りました。——姿は見えませんが互に聲高に呼び合つて居りました。私は浪に隨いて浮いて居るやうにしました。他の者は私を呼びます——「甚よ！ 甚よ！——こつちへ來い——こつちへ來い！」然し私はそつちの方へ行くのは非常にあぶないことが分かつて居りました。浪が横から私を打つたんびに下へ沈められましたから、そこで私は呼び返しました——「潮に隨いて居れ！——流れについて浮いて居れ！」と。が皆んなには解らないやうでありました。——相變はらず「こつちへ來い！ こつちへ來い」と言ひます。そしてその聲が一度一度段々遠くからきこえて來ました。私は返事するのが恐はくなりました。……水で死んだ者は、伴侶が欲しいと、そんな風に「こつちへ來い！ こつちへ來い！」と呼ぶのでありますから。……

『暫くすると其の呼び聲が止みました。聞こえるものは海と風と雨とだけであります。非常に暗くつて、浪だけ、それもその退く時だけ、——高い黒い影のやうに見えて——それがまた一度一度非常に強く身體を下へ引くのであります。その引つぱり方で私はどつちへ向いて行つて宜いか察しました。雨の爲めに浪が大して碎けません。雨が降らずに居たなら、どんな者だつてそんな海では長いこと生きて居ることは出来ませんでしたらう。一刻一刻と風は非道くなつて、浪は

段々高くなりました。——そこで私は其晩夜通し小川の地藏様にお助けを祈りました。……明かりと仰しやるのですか？——ええ、水に明かりはありましたが、餘計はありません。大きいので、蠟燭のやうに光る。……

『夜明けに、見ると海は非道い色で——濁つた緑色をして居ました。浪は小山のやうでありました。そして風は恐ろしい強さでした。雨と飛沫とで水の上に霧が出来て居て、地平線は見えません。然し見える處に陸があつても、浮いて居ようとすよりほかに、何も出来なかつたでせう。腹が空きました、——非常に空きました。その空腹の苦さが直ぐと堪へられぬ程非道くなりました。その日一日私は、風と雨の下に漂つて、大波と一緒に浮かんだり沈んだりしました。でも陸は影形も見えません。何處へ行きをるのか分かりませんでした。そんな空では西も東も判かりやしません。』

『暗くなつてから風は風ぎました。が、雨は相變はらず土砂降りで、眞つ黒です。空腹の苦さは通つてしまひました。が、弱つてしまひました——沈むに相違無いと思つた程弱りました。すると私を呼ぶ聲が聞こえました——丁度前の晩に私を呼んだと同じやうに——「こつちへ来い！——こつちへ来い！」と。……すると突然に、福壽丸の者が四人見えました——泳いで居るのであります、私を横に立つて居るのであります、——寺尾勘吉と、寺尾巳之助と、鷲野乙吉と、それから松四郎といふ男と。皆んな私を怒つた顔して見て居るのであります。そして巳之助といふ男の子が、叱るやうに、大聲で「此處へ私は舵を取りつけねばならぬ。お前、甚之助、お前は

何もせずに眠つてばかり居る」といふのであります。すると寺尾勘吉が——これは私が板をやらうと言つた男であります——それが或る掛物を兩手に持つて私の上へ身體を屈めて、それを半分展ひらげて「甚よ。此處に私は阿彌陀様の繪圖を有つて居る。見い。さあ本當にお前は念佛を唱へねばならぬぞ！」と言ひました。口のきき方が奇妙でありました、——恐ろしいと思はせるやうな。私は佛様のお姿を見て、恐はこは念佛を唱へました、——南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と。と同時に痛みが、火傷の痛みのやうな痛みが、私の股と腰とを刺しました。見ると私は板から轉び出て海の中へ落ちて居りました。その痛みはカツヲエボシがさせたのであります。……一度もカツヲエボシを御覽になつたことが無いのでありますか。エボシ、神主さんが冠る、あの恰好した水母であります。カツヲ（鰐）がそれを食ふから、カツヲエボシと私共は言つて居ります。そいつが何處かへ出て來ると、漁夫は鰐が澤山に捕れるぞと思ひます。體た軀かは硝子のやうに透いて居りますが、下の處に紫色の縁飾のやうなものと、長い紫色の紐があります。こいつが身體へ觸はると、その痛さは非道いもので、長い間とれませぬ。……その痛さでよみがへりません。若しそれに刺されなかつたら、私は二度と眼を覺まさなかつたかも知れませぬ。私は又板の上へ乗りました、そして小川の地蔵様と金比羅様とへお祈りしました。それで朝まで目をさまして居ることが出來ました。

『夜明け前に雨が歇んで、空が霽れ始めました。星が少し見え見ましたから。東雲に又睡くなりました。が、頭を打たれて眼が覺めました。大きな海鳥が私を突ついたのであります。日は雲の

後ろに昇つて居りました。浪は早静かになつて居りました。やがてのこと、小さな鳶色の鳥が私の顔の横を飛びました。——海岸に居る鳥であります（その本當の名は私は知りません）そこで、陸が見えるに相違無いと思ひました。後ろを見ましたら山が見えました。その恰好が何處の山とも私には判かりません。青いから——八九里は離れて居るやうに思はれました。私はそれを當てに泳がうと決心しました——岸まで行ける見込みはありませんでしたけれども。又ひもじくになりました——恐ろしくひもじく！

『私は何時間も何時間もその山目當てに泳ぎました。又も眠つてしまひました。が、今度も海鳥が私を突つつきました。一日泳ぎました。夕暮近く、山の様子から、山に近寄つて來よる事が判かりました。が、岸まで行くには二日かかると思ひました。とても駄目だと殆ど諦めようとして居る時に、不圖船が見えました——大きな帆船であります。私の方指して走つて居るのであります。が、もつと早く泳ぐことが出來なければ、間はるか離れて、行き過ぎてしまふだらうと思ひました。これを外づしては助かる見込みはもうありません。そこで板は棄ててしまつて、出來るだけ早く泳ぎました。船から二丁許りの處へ行きました。それから大聲出して呼ばりました。だが甲板には人つ子一人見えません。何とも返事がありません。と思ふ間に私の前を通つて行つてしまひました。日は暮れかかつて居ますし、私は絶望しました。すると突然男が一人甲板へ出て來て、私に「泳がうとするな！ からだを疲らすな！——小舟を出してやるぞ」と大聲で言ふのであります。見ると、同時に船の帆を下ろしました。嬉しかつたものでありますから、身體

に元氣がまた出て来たやうでありました、——一所懸命に泳いで行きました。するとその帆船は小舟を下ろしました。そして、その小舟が私の方へ来る時に、一人の男が「ほかに誰れも居ないか——お前何か落としたものは無いか」と大聲で言きます。私は「板一枚きりで何も無かつた」と返事しました。……と一緒に私はぐつたりしてしまひました。その小舟の人達が曳きずり上げるのは判かつて居ましたが、口をきくことも身動きすることも出来ませんで、あたりが眞つ暗になつてしまひました。

『一つ時経つとまたあの聲がきこえました——福壽丸の者どもの聲が。——「甚よ！ 甚よ！」と。私はぞつとしました。すると誰れかが私の身體をゆすぶつて「おい！ おい！ そりや夢だよ」と言ひます。見ると私はその帆船の中で、吊り提燈の下で（夜でありましたから）寢て居りました。——そして私の横に、見も知らぬ老人が一人、膝ついて、手に飯茶碗を持つて居ます。「少し食つて見なさい」と大變親切に言ひました。私は起きて坐らうと思ひましたが起きられませんが、そこでその男は自分で、茶碗から、養つて呉れました。茶碗が空になつた時に、もつと欲しいと言ひました。が、その老人は「今はいけません。——先づ眠なければいけません」と返事しました。ほかの誰れかに「私が言ふまで、もう何もやつてはならぬぞ。餘計食はせると、死ぬるから」といふ聲がきこえました。私はまた眠りました。そしてその夜もう二度飯を貰ひました——軟らかく炊いた飯を——一度に小さな茶碗に一パイ。

『翌けの朝私はよほど丈夫な氣持ちになりました。そして飯を持つて來て呉れたその老人が來て私に訊ねました。船の沈没の話聞き、私が海の中に居た時間を聞いて、非常に私を憫れんで呉れました。その二日二晩の間に、二十五里以上漂つて居たのだとその男は話しました。『お前さんが棄てた板を探しに行つて拾ひ上げました。屹度お前さんはいつかそれを金比羅様へ奉納したいのでせう』といふのであります。私は御禮を言ひましたが、燒津の地藏様の寺へ奉納したいと返事しました。それは私が一番お助けを祈念したのは小川地藏様でありましたから。

『その親切な老人はその帆船の船長で、そしてまたその持主でありました。播州の船でありまして、紀州のクキ港指して行きをるのであります。……クキのキは、オニといふ字で、——クキは九つの鬼といふ意味であります。……船の男は皆親切でありました。私はその船へ上がった時は、褌一つ締めて居るだけで、眞つ裸であります、そこで皆が私に着るものを呉れました。一人の男が下衣を呉れる、もう一人の男が上衣を呉れる、又一人の男が帯を呉れました。幾人かが手拭や草履を呉れました。——それからみんなが寄り合つて、六七兩に上るほどの恵み金を私にこしらへて呉れました。

『九鬼へ着きますと——綺麗な小さな處であります、名前は變でありますが——船長は私を上等の旅籠屋へ連れて行きました。そこで二三日休息しますと私は元の通り丈夫になりました。するとその村の長が、その當時の名で言ふと地頭でありますが、それが私を呼びよこして、私の身

の上を聞いて、これを書き付けさせました。事の報告書を焼津村の地頭へ送つてやらなければならぬ、それから後で國へ送り還す途を考へよう、と私に言ふのであります。處がその播州の船長は、私の生命を助けたその船長は、自分の船で送り届けたい、それから又地頭への使者の役目を引き受けたい、と申し出ました。で、二人の間に大分論争がありました。當時は電信もありませんし、郵便もありません。わざわざ使ひの者（ヒキヤク）を、九鬼から焼津へ送るには、少くも五十兩はかかりましたらう。ところが一方にまた、そんな事に特別な法律や慣習が——今頃の法律とは餘程異つた法律があつたものであります。そのうち焼津の船が一艘近くの荒坂へ入つて來ました。そして九鬼の女で、折よく荒坂に居た者が、私が九鬼に居るといふことを焼津の船長に話したのであります。それから焼津の船が九鬼へ來ました。そこで地頭は焼津の船長に託して、——命令の書面をそれに渡して——私を送り還すことに決心しました。

『全體で、私が焼津へ歸つた時は福壽丸が沈没してから、一箇月ばかり經つて居りました。港へは夜着きました。直ぐとは家へ歸りませんでした。家の者が恐ろしがつたでありませうから。尤も私共の船が沈没したといふ確かとした消息は焼津に届いては居りませんでした。船に隨つて居た物を澤山漁船が拾ひ上げて居りました。それにその颱風は非常に突然に來て、海は非道い荒でありましたから、福壽丸は沈没したのだ、乗つて居た者は皆んな死んだのだ、と皆んな信じて居たのであります。……他の者は誰れ一人その後たよりがありませんでした。……私は其晩或る

友達の家へ行きました。そして翌日の朝、父親と兄弟とへ言傳をしました。すると皆んな迎へに來て呉れました。……

『毎年一度私は讃岐の金比羅様へ參詣します。難船に助かつた者は皆んな御禮に參詣します。それから小川之地藏様のお寺へは毎度參詣します。明日私と一緒ににお出になれば、その板をお見せ致します。』

(大谷正信譯)

Driftings (A Japanese Miscellany.)